

賀川豊彦の畏友・村島帰之（その十二）

第 142 回～第 154 回

賀川豊彦の畏友・村島帰之（142）—村島「アメリカ巡礼」

「雲の柱」昭和 7 年 10 月号（第 11 巻第 10 号）への寄稿分です。

アメリカ巡礼

競技場と博物館

村島帰之

オリムピク・スタジアム

八日

けふもまた高橋さんの好意に甘へ、同氏のミシンでエキスポデション公園の博物館を見に行く。美しい花壇が、ひろびろと展げられてゐる。空はカラリと晴れて、日光が直射するけれど、湿気がないので、然し暑いとも感じない。公園の上空を、タイヤの広告飛行船が、夢のやうに飛んで行く。故國の五月節句の空を偲ばせる。

「あの飛行船には一弗出すとのせてくれますよ」と高橋さんが説明される。広告と収益の一挙両得だ。室代よりも入場料で算盤のとれてゐるエンバイヤーステートビルなどと考え合せて、さすが弗の國らしいと考えさせられる。

博物館は朝十時にならないと開かないので、程近いオリンピックスタジアムを見に行く。一九三二年夏、萬國オリンピック大會の開かれる場所だ。砦のやうに壁をめぐる大スタジアムだが、公園が廣いのでさう宏大だとも思へないが、十萬の観衆を容れるといふから相当以上のものである。

今春、ロサンゼルス市の百五十年祭が此處で開かれて、各町から電飾した自動車に思ひ思ひの飾り物をしてその趣巧を競ひつゝ此處に繰込んだといふ事だ。けふは鍵が下りてみて入場出来ないが、綱のネツ口の外から中を窺ふと、数萬のシートのあるスタンドが、美しい曲線と直線とを見せて、来年の大会を待つものの如くだ。

「来年の夏、もう一度いらっしやいよ」と高橋さんがいふ。全く...

自然博物館

博物館が開いたらしいので早速這入る。一階はどここの博物館でも見受けるアメリカインディアンの風俗などで満されてゐたが、彼等の正装に今日の軍人のそれと同じやうな肩章のあるのを見て人間心理の今も昔も大して変りなきか思はされた。二階には貨幣や刀剣や陶器の類が處狭きまで並べられてあつた。

自動車および飛行機の發達の跡を示したものゝ中では一九一〇～二四年の間、英國皇帝ジョージ二世の乗用されたといふ特別大型の自動車が注目を惹いた。第一公式の馬車に只モーターをつけたといふだけのことで、スマートなところは少しもなく、只重々しい感じがする許りであつた。

フォードの自動車が年代順に並べあるのも興を惹いた。

「深田牧師のミシンは今から三十年前のものだ」

など、深田兄のミシンの批評をする。

地下は全部これ古代動物の骨！ 中でもエシパイア・エレファントの巨大なる骨には一驚を喫した。勿論全部が真物ではないが、その幾分が地下の石油層の中から發掘されたのだといふ。動物の骨格は年代と共に小さくなって、その代り、人智によって作られる營造物が反對に年々大きくなって行くのだ。

エシパイア・エレファントの生れ變りが、今日のエンパイア・ステートビルその他の高層建築だといへばいへぬことはなからう。

歴史博物館を出て、向ひ側の産業博物館を見る。貨物そつくりの模型の各種果樹園が、加州の自然の彩りといふものを示してくれる。加州といふところが、如何に果実に恵まれ、その美しき自然の色に彩られてゐるかをしみじみと見る事が出来た。

地階は鉱産物。地底の秘密をさぐる思ひで、ひと気のない地階に降りる。地上の社会の出来事なんぞは忘れて了ふ超現実だ。

博物館を出て家へ帰る途中、スタジアムの裏側を通ると、オリムピック大會までに建て上げるといふので、スイミングスタジアムのコンクリート工事の最中であつた。来年の夏は此處に日章旗が揚るのだ、と想像することは決して悪い気持ではない。祖国愛を知らぬアメリカ生まれの日本人二世のためにも、それは望ましいことに相違ない。

古本を買ひに

午後から静岡牧師の案内で古本屋漁りに行く約束なので、視察を博物館だけにして、ハースト系のロサンゼルス・エキジミナーの社の前を通って教会へ帰る。

静岡兄は既に来て待っててくれた。此度は静岡兄のミシンで出かける。古本屋は直ぐ判ったが、ミシンをパーキングする場所が容易に見つからないので、あっちこちとうろつく。車道と歩道の境界を、赤く一線で塗ってあるところは、停車することを許されない。ところが赤く塗られてゐないところは、殆ど余地のないまでに自動車が詰ってゐる。仕方がないので古本屋は直ぐ目の前に見えても、数町を距てた處にパークするより仕方がない。

「善く盗まれませんか」

「いいえ、屢々やられるんですよ。届出が早いと、警察のラデオで、各交通巡査に、盗難自動車の番号がアナウンスされますから、割合早く判りますが、愚図々々してゐては駄目です。」

何しろ、ロサンゼルスだけにでも五十万台のミシンがあるといふのだ。住民二人に一台の割合で持たれてゐるのだから、恐らくわが國での自動車以上の普及率であらう。往来といふものは自動車のために埋めつくされてゐるやうな感じがするほどだ。

静岡兄は愛書家だけに、どこの古本屋にもお馴染らしく、笑顔で迎へられる。

ほしい本が矢鱈にある。ニューヨークの古本屋よりも欲しい本が多い。犯罪學に関するものを十数冊買うこととする。

静岡兄は、

「待ちなさいよ。僕が値切ってあげますから」

と、交渉してしてくれられた。正札のついてゐるものを、と思つてゐると、十弗のものを八弗に負けた。

「本屋の奴、僕を日本のヂューだといふんですよ。でも、買けてくれるんだから、値切らないと損です」

と、これも不景気のせいだらう。

静岡兄の買った分は小切手で支払つてゐる。

「小切手詐欺が多いので、なかなか小切手では取つてくれないんですが、僕は信用があるんで………」

と、静岡兄は鼻を高くする。日本だったら、とてもこれほど容易く人を信用しないだらうに、と信用絶語の発達を羨しく思った。

鍋焼うどん

静岡兄につれられて、日本人街に食事に行く。丸の中に日本字で八と書いた商標をドアに記した丸八と呼ばれるうどんやだ。

「鍋焼うどんを二つ」

ああ、これがアメリカの一都市である。

「へえ、お待遠うさま」

アルミの鍋に盛られたものは、正しく手打のうどんだ。蒲鉾も這入ってゐる。いや、しいたけさへも。

棚の上を見みると、鰻の代用に用ふらしい柳川の罐詰や浅草海苔の罐が並べられてある。

富士山の額ははいはずもがな。

客もみな同胞だ。話かけても見たいが、しかし……。

夜は清水兄のホームへ徳さんや高橋さんと一緒によばれる。清水夫人は學生として渡米し、その後結婚したのだが、学校へ行かぬと日本へ送還されるので、子たちの出来た今も、なほ学校へ行って居られるのだ。移民法の不当を泌々考へさせられる。

食事をすませて、よばれ立ちではあるが、少しでも視察の能率をあげたいので、ミシンでブロードウエーの第一街まで送って貰って、そこからは勝手知ったブロードウエーをうろつく。そしてパレスキューへ這入る。ニューヨークほどの露骨さはないが、裸形の受けることに変わりはない。唯花道のないのは、好色客には物足りないでらう。

(この号はこれで終わり)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(143) — 村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年11月号(第11巻第11号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(1)

香港近郊

村島帰之

再び桑港へ

十月十七日

午前八時、桑港ステーション着。

久し振りのサンフランシスコだ。前回にはオークランドを経、桑港湾をフェリーで渡って桑港に這入ったので、海上から見た桑港の第一印象は美しいものであったが、此の度は、直ぐ市中へ降ろされたので町幅の狭いゴタゴタした町のやうに印象された。

ロサンゼルスは、何といっても新興都市だ。新鮮味と活気とに満ちみちてゐる。が、桑港は既成都市だ。どっちかといへば保守的な都市ともいへやう。たとへば家の建方にしてさうだ。羅府の住宅は、気の利いたコテージ風かさなくば流行のミッションスタイルを倣し西班牙風のもので、前にはローンなどを作つてゐるが、桑港のそれは依然たるコロニー風のスタイルだ。どれもこれも二階の出窓かあぶなっかしさうに突き出てゐて、形においても、また彩においても変化に乏しい。

道路に至つては比較にならない。ロサンゼルスは善くも道幅をこんなに広く取つたものだと感心させられるほどだ。その代り、自動車の往來の頻繁なことは、到底、桑港の比ではない。

何といつたつて羅府は「青年」だ。これからの都市だ。将来は、桑港を抜いて太平洋沿岸一の都市となることは明瞭だ。

桑港は「成年」だ。従つて落ち着きがある。応揚さがある。紳士の風がある。

エロータクシーを雇つて、加州通りの小川ホテルへ行く。マネージャーの秋谷一郎兄はまだ眠つてゐた。

桑港は寒い。私は室内に這入つても外套を脱がないので、帳場さんが同情して、表側の温い部屋へ通してくれた。

サンタババラ以来、風呂に這入つてゐないので、バスに這入る。

朝飯を秋谷兄と共にして後、暫くベッドに這入つてまどろむ。

午後、パーラーで三菱商事の山田雅一氏と語る。氏は燃料部滑油係を勤めて居られるので、石油の話が出る。私がロサンゼルスにシグナルヒルの油井を親察した話をすると、「日本全体の石油噴出量は一年五百萬石です。恰度、シグナルヒルの一月分にしか当らないのです。」と話される。またサンピトロで、重油の給油所を見たことをいふと、三菱でもあすこへ船をつけて、重油を日本へ運んでゐるといふ話。

さらに米國に於けるガソリン販賣戦に話が及んで、英資本の貝印が、あなどれぬ勢力だと話される。

日本にも、どこかでシグナルヒルのやうな油井が掘り当らぬものかと泌々思ふ。

ボードビル行

夕飯後、秋谷一郎兄および令妹百合子さんと三入でフォックス劇場へ出かける。サタデーの夜と来てゐるので、客は列を作って入場を待つ。押され乍ら—といつても日本のやうに無理に押しはしない。立派に統制のとれてゐるのは羨ましい—中へ這入ると、恰度、ニューヨークのロキシー劇場で見たやうな大きなホールがあつて、そこで場内の椅子のあくのを待たせる。

高い天蓋はステンドグラスになつてゐて、周囲はローマの宮殿をイミテ—したゴチック式の彫刻と金の色彩で一杯だ。太い中肥りの円柱がガッチリとそれを支えてゐる。ロキシーに劣らぬ豪壮美だ。

漸くの事に、シー—があいて席を占める。オーケストラが始まつてゐる。

音楽に造詣の深い妹さんが説明してくれられる。

桑港で誇るべきものはオーケストラだ。日本にはこれだけのオーケストラは余り見られまい—との事だ。オーケストラの中にはハープも交つてゐる。それだけが女性で他は全部男性である。

フリッピンの独唱があつて、映画「フランシスキッド」が始まる。メキシコのカウボーイとセニョリータの恋を扱つたものだ。続いてステージが始まる。パラソルを主題としたのや、乳母車を引いた子守を扱つたものなどがある。殊に後者は人形振りを用ゐて、日本の人形振りを、西洋式に行つたやうな愉快的なダンスがあつて、ミッドナイトショーの客を喜ばせた。

ミッドナイトショーは土曜日に限つて行はれる深夜興業で、客もハメを外して野次なのだ。

筋骨の柔かな女の乱舞がある。足を手と同じやうに動かして乱舞する姿が、どうしても人間とは見えない。逆さまの位置から舊位置に戻つた時の上気した赤ら顔の彼女を見た時、私は興奮の拍子をする代りに、同情の吐息をついた。

音楽道化があつて、自転車の曲乗り—樽のやうなものの中を圓形に乗り廻すのだ。車が頂辺に行つた時には、明かに頭が下になつて、当然、下へ落ちねばならぬのが、物理学の法則によつて落ちずにゐるのがハラハラされ乍ら不思議に眺められた。

次に、スクリーンに現れて来る歌の文句を見ながら、ピアノに合わせて會衆一同が流行唄を唄ふ。歌のコーチだ。甘つたるい恋の小唄が、普通の會話にやゝ抑揚をつけた程度の譜で、急テンポで唄はれて行く。

會衆のコーラスに、同一音譜のくりかへされて行くに従って漸次高まって行った。歌が終ると、急霰の拍手、そして口笛、足踏み！

觀衆が芝居をし、音楽を奏してゐるのだ。そこには舞台と觀客席の区別がない。これが本当の民衆娛樂だと思ふ。

ホテルに戻ったのは十二時半。劇場の内ではまだ宵だと思はれてゐたのに。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(144) — 村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年11月号(第11巻第11号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(2)

香港近郊

村島帰之

(前承)

金門公団見物

十八日

午前九時起床。午後から秋谷兄と一緒に外出する。

ホテルに近い支那街には、到るところ、日貨排斥のポスターが貼られてゐる。満州事變のためだ。或時は空中から支那式の色とりどりのピラもまいたさうだ。この街の中に交って商賣をしてゐる日本の商店や理髮屋は困つてゐるといふ。

ここには約二萬の支那人がゐるさうだ。電車で金門公団へ行く。太平洋海岸まで長さ三哩半、幅半哩に亘る広いチェーカーの大公園で、森あり、湖あり、瀧あり、銅像あり、運動場ありといふ、変化に富んだ公園だ。

博 物 館

まづ博物館へ這入る。ここは全然入場料を徴収しないので、一年に五十萬から百萬人の入場者があるといふ。日曜などは一日に五千人以上入場する。

エッチングの聚集の多いことにまづ驚く。彫刻の中で、ソーロ王の像などが目についた。ブロンズの部では「神戸楠公さんの銅製燈籠一對」が私たちの足を止めた。どうして此処へ陳列されるやうになったのか不思議だ。奈翁の寝たといふ寝台やアメリカインディアンのトーテムなども興を惹いた。

博物館を出ると、前は音楽堂だ。ギリシヤ劇場式の舞台で、ルネッサンス式の建築だ。観客席らしい設備はなく、一帶の樹木の下に、約一萬人を坐らせる木のベンチが置いてあるだけだ。樹木は十三州から集めた記念樹であるとか。

日本茶園

ついでに、博物館の隣りの日本茶園を見に行く。こゝは故萩原真氏が作り上げたもの。桜門あり、鳥居あり、お宮さんあり、佛像あり、池あり、石橋あり、土蔵あり、鐘楼ありといったニッポン・オン・パレードだ。中央の茶店では渋茶と鹽せんべいを賣ってゐる。多くの西洋人がそこで渋茶を啜ってゐる。

少々疲れた。博物館の北方の日時計などを見乍ら帰途につく。

ウオー、フィールド劇場

夜は勇を鼓してウオー、フィールド劇場へ。パンツをはいた案内女が案内してくれる。入場料六拾錢。

映画「スカイ、ライン」では、ニューヨークの景色の出て来るのが、何よりもなつかしく見た。もう一度ニューヨークへ引返したいやうな気がする。

ここはオーケストラが善いので有名ださうだ。コンダクターは、タクトが巧いのみならず、とても滑稽が上手で、観衆をヤンヤといはせる。黒ん坊のアルトや、女装のソプラノは、コンダクターの滑稽と相俟って大拍手だ。

日本でなら、何の誰といはれるほどの音楽家は、これほど道化の寛容さはあるまい。日本人は余りに澄しすぎるのではあるまいか。私たちはアメリカ人の捌け方を取る。

赤毛布の話

十九日

昼飯はワッフルと牛乳で済ます。朝飯が遅かったので腹が減らないからだ。慶大野球団の腰本寿君が、渡米中、レストランのメニューが判らないので、いつもホットケーキを喰べてみたと話してゐた事が思ひ出される。

実際、こっちのメニューが複雑だ。同じミートでも、その肉の部分によってその名が違ふし、スープでもいろいろあるから厄介だ。なまじ、通ぶって注文すると、飛んでもないものが来る。K牧師は、船中でメニューの最初から順々に注文したらスープ許り来たといふ話がある。私も若し往航の船中で、同行の小川さんからコーチを受けてゐなかつたら、屹度、今日もワッフル、あすもワッフルをやつてみたかも知れない。たゞに喰べもの許りではない。萬事に赤毛布を曝露しなかつたのは賀川・小川両先輩の指導の賜物だ。

赤毛布といへば、誰でもが演ずる赤毛布の第一課は、西洋風呂に這入るのに日本風呂同様に掛かり湯をして這入ることだ。これがために水が階下に漏って大騒動を演じたといふ話は到るところで聞く。

第二課は便所だ。水洗式便所に這入った事のない人に、水を出すことを知らない。また知つてゐても、容易に水の止らないのに驚いて、もう一度引く、いよいよ止らない。あわててまたもや引く・・・といった按配だ。そして漸くの事に水の止るのを見て出やうとするとキーがあかない。あかぬ筈はないのだが、あわててゐるのであかぬのだ。私は予ねてから此の事をきいて知つてゐたので、便所に這入る際にキーの構造を調べて後、徐ろにドアを閉めろ事をした。

汽車が停車湯に停つてゐる間はたとへ用便をしても水を流さぬ規則になつてゐる。誤つてフラッシュしてしまへば、停車場構内に黄金の山を築く訳だ。で、停車時間の永いステーションでは、ボーイが外からキーをかける事がある。さうした場合、用便中の乗客は、汽車が発車して、ボーイがキーをはづしてくれるまで出られない。同行の某氏は、ボーイが冗談半分にキーを掛けたので、数分間雪隠詰めになつた。

またこれはさきの日に別れた同行の某氏が船中での失敗談だが、某氏、便所から部屋へ戻つて来ての曰くに、「西洋式の便所といふものは、ばかにお尻の冷めたいものですなア」と。彼氏は木枠をおろして尻に敷かず、瀬戸をそのまま尻にして用を辨じたのである。これでは尻の冷へる筈だ。話が尾篋になつて来た。元の記事に帰らう。

(つづく)

「雲の柱」昭和7年11月号（第11巻第11号）への寄稿分です。

アメリカ巡礼（3）

香港近郊

村島帰之

（前承）

フェーリーに乗る

正午、バークレーから今井よね子さんが訪れて来て下さる。そして、これからオークランドおよびバークレーを案内してやろうといはれる。渡りに船と早速出かける。

まづマーケット街の端にあるフェーリーへ行く。フェーリーとはいふまでもなく渡船だが、この渡船は船頭が櫓を漕ぐ式の渡船ではなく、たとえば関門の渡船のやうな、千噸級の船が乗客は愚か、汽車や自動車をも渡してくれるのだ。

每一週間に、ここをこの渡しで桑港湾を渡って行く客だけでも、百萬人以上からにのぼるといふのだから剛儀だ。正に世界一の大フェーリーである。こゝにはサウザンパシフィック、キーシステム、サンタフィー、ウェスタンパシフィック、ノースウェスタンパシフィックの各鉄道が連絡してゐて、東部から来る客、東部へ行く客は皆こゝを通るのだ。

フェーリーステーションの建物は桑港の代表建築の一つで、一八九六年工費百萬圓を費して建てたもの、長さ六五九フィート、幅一五六フィートの大建築だ。中央に高く聳えた時計台はニューヨークの自由の女神のやうに海路桑港を訪れて来る者が、第一の目標とするところである。

フェーリーはオークランドへ行くキー・システムとサウザンパシフィックの二競争線を始めとして、アラメダに行くもの、サウスリトへ行くものおよび自動車用のものなどに分かれてゐて、殆ど間断なしに動いてゐる。

私たちはオークランドへ行くフェーリーに乗る。舟の入り口に **Save time eat on the boat !** とあって、船中の時間を利用して食事が出るやうになってゐる。

サンフランシスコ湾

船は直ぐ動き出した。

白い大きな鷗が船と平行して飛ぶ。乗客が喰べあましのパンなどを放ってやるのを知ってゐるからだ。時には欄干の上に翼を休めて、「誰かくれさうなものだ」といふやうな表情で人の顔を見まわす。

湾内の中央にある孤島ヤーバ、ゲエナ島は米海軍の海兵養成地だ。碇泊してゐる船の内、白いのは軍艦といふ事は判つてゐるが、船体全部を朱色に塗ったのは何かと訊いて見ると、救命船だとの事。

ここは一八三五年頃、ハワイから野羊を移殖した人があって、一八五〇年頃には千頭以上もゐれたといふ。それに因んで、この一名ゴート島とも呼ばれてゐるが、将来桑港とオークランドの間に一大鉄橋が架設される場合には、この島が中継になる筈である。

エタバ、バーナ島の背後に、怪奇な巖のやうな島が遠望される。それはアルカトラ島（ペリカン島の意音ベリカン鳥が棲んでゐたのだ）といつて、米陸軍の監獄だ。島の周囲は急流で、曾てここを泳いで逃げ終せた者は一人もなかつたといはれ、兵士たちからは、「巖」と呼ばれて怖しがられてゐるところだといふ。

またエルパ、バーナ島の東北方、遙か彼方に見えるのは、わが國民の間にも有名な検疫所のあるエンゼル島だ。今日まで上陸を阻まれ此處に抑留されて、眼前にアメリカ大陸を見ながら、空しく帰還を命ぜられた同胞の数の如何に多かつた事よ。

オークランド

私たちは約十五分間でオークランドのフェリーステーションに着く。ここはオークランドの市街から約四哩を離れた海中で、市街との間を専用の栈橋によって電車が連絡してゐるのだ。

電車は私たちをのせて天の橋立のやうに海中に突出た栈橋の上を走る。

フェリーの賃金は、電車賃と合せて貳拾壹錢也を、この車中で徴収した。

四哩の栈橋もノーストップで走って直ぐオークランドのブロードウェー着。名はニューヨークやシカゴのそれと同じブロードウェーだが、寂しい街だ。トリビューンと呼ばれる新聞社のビルディングが高く屹立してゐる。

オークランドは人口三十二萬の都市だ。最初は寂しい部落だったが、一八四九年のゴールドラッシュ以後、漸次大きくなって、水運の便利なのを幸ひ、海岸一帯が工場都市として発達するやうになり、桑港の急激な膨脹から、此處が桑港に勤めるサラリーマンの住宅地となった。それは恰度、ニューヨークの膨脹による、對岸のニュージャージーの発達と同じ式だ。私たちは朝夕、ここと桑

港との間を、フェリーによって往来する多くのサラリーマンの群を見ることが出来る。

彼等の住宅は南加で見るやうなスパニッシュ式が多い。

佳人の奇遇のメリット湖

私たちは約十ブロックほど歩いてメリット畔に出た。不忍池を偲ばせるやうな楕円形の湖水だ。池の東北方は小高い丘になってゐて、そこには一面、美しい館が樹の緑の間に点綴してゐる、いはずと知れた富豪たちの住宅である。

その中にもこんもりと茂った森のあるのは、ミルスカレッジとそれに隣接する天文台である――と今井さんが説明してくれる。南方には、市のオーデトリウムが池畔に臨んで立ってゐる。ここは一萬三千人の聴衆を容れ得る由。

かうしたものの中に囲まれた湖はあくまで澄んでゐて、美しい周囲の映像を宿してゐる。この湖畔は、明治文学で名高い「佳人の奇遇」のその佳人が奇遇する場所だ。記者柴四郎氏も曾ては此処に遊んだ事もあるに違ひない。

全く佳人の会合には相応しい場所である。私たちは暫くその芝生に腰をおろして展望した。

小憩後、電車でバークレーに向ふ。バークレーとオークランドは隣接してゐるので、どこからがバークレーか判らずに来て了つた。

バークレー

バークレーは人口八万の小都市だが、カリフォルニア大学があるので大学都市として有名だ。

まず最初に太平洋神学校に向ふ。美しい石造建物だ。ここはカレッジを出た人が学ぶところで、生徒は八十人程しかないが、先生は二十人もゐるさうだ。今井さんも曾て此処にいた事がある。賀川先生は過日此処で講演をせられたことは、さきに記した処だ。

学校は丘の上に建てられてゐるので、その端に立つと、バークレー、オークランドの市街が一望の裡だ。桑港の街も、桑港湾を距てて見えるさうだが、けふは曇つてゐてハッキリしない。

加州大學

去つて加州大學へ行く。構内は五三〇エーカーの廣さで、到るところにオークの並木やユーカリの樹の森が点綴し、一大公園を形ち作つてゐる。校舎はところどころのその緑蔭に建てられてゐるのだ。

大學の中心をなすものは高さ三〇二フィートの時計塔だ。この工費二十萬弗。その上のチャム一十二のベルから成る一一二萬五千弗といふ費用を投じたといふ。この時計塔一つの費用があったら、日本なら、大學の一つ位は建つのに一一。

塔の下の方に圖書館がある。優に大阪府立図書館位はある。中へ這入ると、右側がモリソン記念文庫、左は臨時開覽室。二階へ行くと、一般大學生と大學院學生の開覽室が別々に作られてゐる。

學生たちは或はAMとか、DBとか、或はその上のPHDを取らうとして一所懸命だ。日本の學生か就職難で困つてゐるのは少し趣きが違ふ。

金のある國の學生は物質慾よりも名譽慾に傾くのかも知れない。どちらにしても學問そのものが目的といふより、手段なんだから情けない。

今井さんは、いろいろと、この学位論文に伴ふ悲喜劇を聞かせてくれた。

或る青年は同期卒業の婦人と結婚し、夫婦して論文を書いたが、婦人の方は見事にパスして学位を得、児童心理か何かの学者として天晴地位を獲得したが、一方、良人の方はいくらやっても論文が通らない。そのために博士なる夫人は良人に對し、あなたが博士になるまで別れる一一と宣言した。良人學士はその後も一所懸命にやつてゐるがなほ學位が得られず、そのために復縁も叶はずにゐるといふ。

この話を聞いて、私はバニティーとプライドの権化ともいふべきアメリカの有識夫人がいよいよ嫌ひになった。私は男性として日本に生れ合せたことを心から感謝するものだ。

更に丘の上の方へ廻つて、グリーキシアターを見る。これは昔のギリシヤのエピドーラスの劇場を倣したもので一萬のコンクリートのシートが作られてある。舞台は弧形をなした無蓋のもので、背後は鬱蒼たる木立だ。嘗ては此處でクライスラーが弦を握り、ホフマソ、シューマン、ハイレが立ったといふ。大學の卒業式なども此處で行はれるとか。

夏は毎日曜午後、此處で音楽があるが、夜になると、殊に月明の夜など、多くの學生か、異性の級友などと連れ立って月見に来るといふ。アメリカの學生は最も善く學生生活を享樂してゐるものといへやう。

俱樂部もある。勿論、各種の運動設備もある。殊にスタジアムは百二十五萬弗（邦貨貳百五拾萬圓、驚くじゃないか）を投じて建てたもので七萬五千のシートがあるさうだ。金のない日本の大學よ。以て如何となす。

突然、タワーのチャムが鳴り出した。六時だ。夕日が塔の背後からあかあかと照つて、塔の影を

ながながと地上に落す。

大学生が三々五々帰って行く。男學生は多くは上衣を着ない。帽子のないものが多い。或者は赤ン坊のやうな帽子を申し訳に頭の尖端にのせてゐる。女學生も粗末な服装だ。ストッキングをはいてゐない者さへある。

日本でいへば一高式だ。わざとしてゐるのでさへなければ、善い事に違ひない。

幾冊かの書物を、その儘抱えて行くのも面白い。日本の風呂敷は便利だなァと思ふ。

男女大學生が仲よく並んで行く。日本がさうなるのも遠くはあるまい。

大學の正門から出る。タクシーを傭はうとするが見つからない。田舎の人は大概ミシンを持ってゐるからだ。ニューヨークなどではガレージの費用だけでも大したものだから、なかなか私用ミシンは持てないんだけど。

帰途、山田さんに敬意を表した後、夕飯を共にして、今井さんとお別れする。

キーシステムの電車に乗ると、フェーリーに連絡して、そのまま桑港へ運んでくれた。フェーリーも夜はさすがに客もまばらだ。

小川ホテルに帰ったが、その儘寝るのも惜しいので、カピタルヘパーレスクーを見に行く。例により、ジョークと裸踊と唄のカクテルだ。ニューヨークのやうな跳発的なところはない。勿論、裸形の女の素肌を御覧に入れるための花道などもない。また裸の女に対するアンコールの拍手もニューヨークのやうに激しくはない。桑港は応揚な舊家の風がある。

(この号はこれでおしまい)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(146)ー村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和7年12月号(第11巻第12号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼 (1)

サンフランシスコ

村島帰之

ハロイン

十月二十日

買物をしやうと思って、マーケット街を歩く。日本人の手になった菊の花がショーウィンドに匂ってゐる。各種の品物は弗としては安くても日本金に換算して考へると、とても高いので、容易に手が出ない。

唯拾銭ストアだけは、しみじみ安いと思ふ。靴下でも、首飾でも、石鹸でも、皿でも、玩具でも、何でも拾銭であるのだから素敵だ。唯うっかりすると、日本の製品を買ふ事があるので注意を要する。

恰度、今は□ロインの前で、ハロイン用の怪奇な紙製品やカード類が均一店の店頭をトキ色に染めてゐる。

ハロインといふのはクリスマスに先行するアメリカにおける年中行事の一つで、ローマから渡来したものだといはれる。ハローは聖者の意で、各地に散在してゐる聖者の魂が、十月三十日の夜には戻って来るといふ言ひ伝えから、この夜は宵のうちから打ちつどうて一夜をあかすのである。そして會衆は各人思ひ思ひの怪奇な冠物やマスクをかぶり、電灯にも、トキ色の怪奇な絵模様の袋をかぶせて、百パーセント怪奇な空気を醸し出さうといふのだ。

日本なら、さしづめお盆といふところだ。拾銭店の店頭には並べられたハロイン用の品々を買求める。当夜のパーティーに招くカードにも、黒猫や歎きの猫や、鼻や、かぼちゃのお化けが描かれてあつた。

結局、ハロインのカードなどを買つたゞけで手ぶらで帰る。

夜は秋谷氏から三流ホテルと賣笑の関係などについて話を聞く。ホテルの宿帳を抜いて見ると、新渡戸稲造、牛島謹爾などの名が見え、私の知友では新妻莞爾、北尾鎌之助、腰本壽氏等の名が見える。また水谷八重子や東花枝の名もあつた。

東花枝は新劇勃興時代の女優の一人。私も會つて知つてゐるのだが、秋谷氏の令妹に聞くと桑港へ来てからは男のために苦勞をしつづけて死ぬ前頃は、殊に気の毒な有様だつたといふ。

二十一日

正午、今井さん来訪、前日、出来なかつた買物の案内をして頂く。桑港一のホワイト・□ウスへ行く。こゝは高價だが品物が上等で、しかも善く品種が揃つてゐる。

地階は主として婦人の衣類だが、今井さんの説明で大分學問をする。去つてメーシーへ行く。ここは少し柄が落ちる。

食事をしてから、私がロサンゼルスから携えて来た植松氏寄附の「ロサンゼルスにおける賀川先生」の映画を寫して今井さんにお見せする。再度東部を傳道中だった賀川先生が明日帰桑の電報来る。

賀川先生の帰桑

二十二日

朝七時半起床。珍しく雨降りだ。早速雨具を着てフェリーへ賀川先生を出迎えに行く。ラッシュアワーとて、サラリーマンが列を作って下りて来る。半数以上は女だ。

アメリカは女の威張る國でもあるが、また同時に女の働く國でもある。経済的に独立性があるだけに、威張るのであらう。最初、アメリカが女を威張らせたのは、植民地における両性の需給関係から来たのだが、今ではこれが両性の経済的關係に変わって来たともいへぬ事はあるまい。

定刻、先生が小川先生と一緒に降りて来られた。半月振りの對面だ。

「どうでした。イーストは」

「素晴らしい盛會でしたよ、殊にトロントでは總理大臣まで来ました。」

と大元氣だ。

「からだの具合は如何です」

「大丈夫です」

いよいよ安心だ。出迎の幸田、玉置両氏と一緒に、日本人教會へ行つて、そこから正金銀行へ出かける。私は船賃のため五百圓也を信用状から取出す。

五百圓は二百四十五弗にしかならない。先生が行員の某氏と話してゐる間、私は白人の守衛さんとブローケンで話す。

「日本人は勇敢で、しかも謙遜だ」

とほめる。

次で郵船へ行く。先生は桑港からダラー汽船のリンコルン号で布哇に向ひ、一週間講演して後、浅間丸で帰桑されるのだが、途中で船を替へるため、直行の場合に比し約九十弗ほど余分に要るので、私はその金を節約するため、先生より桑港発を一船を遅らせ、最初から浅間丸に乗込む事に決めた。今井さんもそのやうにする事となった。

浅間丸桑港横濱間二等賃金百九十弗也を支拂ふ。

中瀬支店長の紹介で、浅間丸の船長と面会する。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(147)ー村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和7年12月号(第11巻第12号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(2)

サンフランシスコ

村島帰之

(前承)

友遠きより来る

正午、小川ホテルに帰って、スキ焼を賀川、小川、今井、秋谷、村島の五人です。賀川先生が煮き役だ。そこへ、ロサンゼルスから徳、鶴浦、古谷、高橋の四氏が自動車で駆けつける。

「今朝三時にロサンゼルスを出たのですよ」
との事。友遠くより来る、また楽しからずや。早速、スキ焼會を拡張する。聞けば四人が交互でドライブして夜を徹してやって来たのだといふ。

私が出発を一週間延期したといふと、
「じゃ、僕たちの自動車に乗せてロサンゼルスへ帰らう」
といふ。うれしい冗談だ。もう一度ロサンゼルスへ帰りたいたいといふ気持ちを禁じ得ない。唯「金さへあれば」だ。

食事が済むと、先生と徳、小川、今井、村島の五人はタクシーで雨を衝いて金門公園へ聖者ダミエンの銅像を見に行く。

が、いくら探してもダミエンの銅像は見つからない。博物館で訊いても判らない。
ついでに博物館を一巡する。私には二度目の経験だ。

小川ホテルへ戻った。「羅府における賀川先生」の十六ミリ映書を私の部屋で映して見る。私はしきりと映画撮影機が欲しくなった。布哇行を変更して浮いた九十弗を利用して、買ほうかと思ふ。

晩餐は正金銀行員某氏から賀川、小川両氏と共に私も招かれたが、ロサンゼルス兄弟たちと一緒に食事をしたいので、私だけ断る。先生は小川ホテルの食堂でその銀行員の夫妻と會食される。

私たちは加州通りの海魚専門のレストランへ行く。古谷さんの健啖なる、昼も飯櫃一杯一人であったが、晩もコーヒーを二杯平げた。古谷さんは「野の英雄」だと思ふ。その粗野にして、而も信仰の堅いのを思ひ合せて。

食後、私の部屋で、先生たちの會食の終わるのを今か今かと待ち乍ら、久し振りで愉快的時間を羅府の兄弟たちと共に持つ。

九時になって、漸く先生は私たちの部屋へ顔を出した。早速、ロサンゼルス残りの揮毫をして貰ふ。余り沢山の依頼なので、大きい絹地は小さく縮めて書いて貰ふ事にする。十時過ぎまでに半数ほど書上げたが、先生の眼が赤くなって来たので止める。そして先生は教會へ。ロサンゼルス徳、高橋、古谷の三氏は私と同じ小川ホテルに泊。

二十三日

七時過、目がさめたが、早すぎると思つて寢床にみると、ドアを敲く音がする。這入つて来たのは古谷さんだ。

「百姓をしてると、朝はきまったやうに五時頃から目がさめてしまふのんや」

そこで私も起きる。顔を洗つてみると、徳さんも、高橋さんも起きて見える。

八時、一緒に食堂で朝飯を取る。賀川先生が農民福音學校やセツルメントのため活動寫真機を欲しがつて居られる話が出る。すると、古谷さんが、

「今は金がないが、出来るやうになったら買って寄附するよ」

と言ふ。徳さんが、

「君一人で寄附せんでも善い。同志を募らう」

といふ。先生の希望を、直ぐそのまゝ容れて具体化させやうといふ羅府の兄弟たちは、まことに賀川先生の知己であり、同志だといへやう。

オート・フェリー

九時から、古谷さんの自動車を高橋さんがドライブして、賀川先生のアメリカにおける最後の講演を聞くためオークランドに向ふ。途中、教會に立寄つて鷺山二三郎氏を迎へ入れ、雨の中をフェリーへ行く。

オート・フェリーは紐育でも乗ったが、桑港では最初だ。自動車を船へ乗り入れると、間もなく船が動き出した。車を下に置いて、フェリーの階上へあがる。雨中の桑港湾の景色はまた格別だ。白い鷗が飛ぶ。フェリーが行交ふ。

島々は雨で霞んでぼんやりとしか見えない。淡絵の景色だ。

オークランドの街は一種の野趣を帯びてゐる。スパニッシュ風邪のミッションスタイルの家と、桑港のやうなコロニースタイルが混ってゐる。

おけいの話

車中で鷲山さんから「佳人の奇遇」の話や「おけい」の話聞く。

おけいといふのは北米へ移民した最初の日本の女、明治四年に十九歳の妙齢で sacrament 近郊のブラサヴィルにおいて死んだのだが、今そこには「おけいの墓」なるものが残ってゐるといふ。

おけいは最初の日本移民の監督スネルの妻の従者として渡来したものである。一行はいづれも會津の者であった。「佳人の奇遇」の筆者柴四郎氏も會津の人だ。同氏もおけいを知つてゐたに違ひない。鷲山さんは文學者（牧師でもあるが）らしい空想を描いて、面白い話をしてくれた。

ミルス・カレーヂ

間もなく、森の中のミルス・カレーヂに着く。スペイン風の講堂で、今しも賀川先生の講演が始まってゐる最中だ。

「この講堂はサンタバーバラのオールドミッションそのままだ」

と私がいふと、鷲山さんも同意して、

「ミッションスタイルがこの辺には似合ひますよ。ビザンチン式の建物は確かに善い」

といはれる。

ここのカレーヂは女ばかりの學校で、男女同學のアメリカとしては一異彩たるを失はない。

講堂は満員なので、私たちは外で立って聞く。一日一回の講演なので、落ついた調子で話される。とても聞き善い。

講演が終わってから天文台を見に行く。これは一八八四年、一般及び一般學校のために一といつてキャボット氏から市へ寄附したもので、二十インチと九インチの二つの望遠鏡が据えられてゐる。小學生たちが毎晩團體を組んで押しかけてくるといふ。

所長が案外してくれる。所長の夫人の姉に当る人が賀川先生の「愛の科學」の翻訳をこの天文台

の一室でなされたのださうだ。

観測室にはワシントンから直通の時報のラヂオが据付てある。小學生のためにレクチュアをする講堂には、地球の回転する状況の模型などが並べられて興を惹いた。

雨は全く止んだ。高台なので、全市が一目に見下される。

自動車で再びフェリーへ、そして小川ホテルへ。

賀川先生の出発

いよいよ賀川先生がアメリカ大陸を去る時間が迫った。遠方からわざわざ見送りに来てくれた羅府の兄弟達と、鷺山牧師、オークランドのイエスの友山田さんとわれ等、私の部屋に集って祈りを共にする。

病身の先生を支えてくれた感謝、アメリカにリバイバルを起してくれた感謝。加州に起こりつつある神の國運動に對する祈り...

一同の祈りはそれだった。

食事を共にする。楽しい食事を。

かくて四時、いよいよ先生は出発だ。一同、埠頭に見送る。

乗船はダラー汽船のリンカーン号。この船は日本汽船のやうな二等がなく、三等はとてもひどいとの事で一等をとられた。一室に二人だ。ボーイはみんな支那人である。桑港の牧師團から川島、幸田、相浦、小田、藤井、玉置、鷺山氏が送って来られた。羅府の連中は勿論。

四時、船は動き出した。賀川、小川両先生がデッキの窓から首を出して手を振る。テープの嫌ひな先生は唯手を振るだけだ。

雨は晴れて快晴だ。船路の平安を祈りつつ、帰途につく。

羅府の兄弟たちは、波止場から直ぐに自動車を羅府へ向けられる。羅府へつくのは夜も大分遅くなるであらう。

賀川先生を一足先へ太平洋に送った私は、次の瞬間に、また羅府の兄弟たちとも別れを告げねばならない。賀川先生とは数日後にまた逢へるが、羅府の兄弟と此の次に逢へるのは果していつだらう。センチが胸に湧き上る。

「また羅府へいらっしゃい」

「ええ、是非、あなた方も日本へ、ね」

堅い握手を交す間もなく、兄弟たちは急いで自動車上の人となった。全く、あわたゞしく。

二十四日

いよいよ一入ぼっちだ。食べものゝ関係で腹具合が善くない。おじやを喰べる。ひけつすることは盲腸の惧れがあるが、ゆゑむ方は安心だ。アメリカへ来た最初は、肉食のためひけつして盲腸を起す者が多いと聞いてゐる。

昼間は部屋で一日書き残しの日記を書いてゐたが、晩九時になって、秋谷兄と一緒にミッドナイトショーを見にフォックスへ行く。ここへは二度目だ。

タップダンスを巧みにとり入れてあやつり人形の振りを地で行くのや、ローラースケートを利用した水兵ダンスなどが面白かった。映画はフアレーの戦争映画。例によって歌のコーチがあり、會衆一同が唱和した。

(この号は此処までで終わる)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(148) — 村島「アメリカ巡礼」

「雲の柱」昭和8年1月号(第12巻第1号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼

羅府の日本小児園を見る

村島帰之

十月六日

午前十時、渡辺牧師が自動車で迎へに来てくれたので、これに同乗して同氏の牧して居られる教會に行く。そして約一時間、婦人會の人たちのために、主として賀川夫人の事について話す。

終つて、婦人會の役員たちと午飯を頂いてゐるところへ、高橋さんが、自動車で迎ひに来てくれた。これから、同氏の案内で、小児院その他を見學に行かうといふのである。

邦人経営の小児院——その名を「南加小児院」といって、羅府の西端、サンセット・プルバードの丘陵の上に立てられてあつた。傾斜を利用して、幾つかのホームが廊下によってつながれて建てられてあつたが、いづれも快い日光を全面に吸って、見るからに快い環境だ。

主事の楠本六一氏が不在なので、助手の白人の婦人が案内してくれられる。

此處に収容されてゐる児童は最低生後十五箇月から、最長は十二歳までで三十三人、小さい児は、ベッドに寝かされ、保母があいてになつてゐるが、全収容児の半数以上を占める學齡児は、いづれも附近の小學校へ通學してゐるとかで、私たちの行った時には、保育室に数人の幼児がゐただけであつた。

この小兒院に収容される児はいふまでもなく在留同胞のこどもたちである。その収容理由を訊くと、最も多いのに、母の死亡と母の病気で、全数の半数以上を占めてゐる。これが内地だったら家族制度が厳として存在して、母がなくとも身寄りのものの世話になることも出来ようが、古里遠く離れた他郷では、母なき後の児の面倒は父が見ねば誰もない。しかもその父親たるや、多くは出稼の無産者だ。児に手をとられてゐては、喰べることが出来ない。殊に、加州同胞は概ね晩婚で、その父は生活力の漸く衰へた老人だ。幼い児供を抱えてどうして生活が出来よう。

かうした家族制度のないことと、生活難と晩婚の三つの事実が、母なき児を小兒院へ送らせて來るのである。

母の病気以外に、両親の病気、父の病気、それに父の死亡と母の病気、母の死亡と父の病気、の二つ重つたものもあつて、兎に角、扶養者の病気のため、児を育てる余裕がなくなつて、収容されて來たといふものが九割九分を占めてゐるといふのだ。

病気の中でも、母の病気が最も多数であることはいふまでもない。母さへ達者だったらどうして児を手放ささうぞ。

在留邦人の病気といへば、肺結核に決つてゐる。小兒園の過去の統計を見ると、収容児の七割五分までは両親或はそのいづれから肺結核で斃れてゐる。そして残りの二割五分の内二割までは母の發狂だ。

在留同胞の中でも、無産者に属する人たちの受ける災害は、結核と發狂であると聞いて、誰か憮然たらざるものがあらうか。

故郷を去つて遙々と異邦に來て働いた末がこの最期とは！ もちろん、それが出稼邦人の全部ではないにしても「海外發展」「人口問題の解決」「富源の開發」等々の華々しい移民奨励の言葉の裏に、この悲劇の潜んでゐることを、内地の同胞は知らねばならぬ。そして海外に働く同胞のためにその祝福を祈らねばならない。

案内役の高橋さんはつけ足して説明してくれた。

「何しろ、在留同胞の結婚年齢は夫五十歳、妻三十歳ぐらゐで、双方の間に二十歳位の隔りがありますが、妻が死んだ場合など男は全て氣落ちしてしまひます。あと添ひを貰ほうにも、モウ寄る年

波だ。寫真結婚は許されないし、それに白人は勿論来てくれませんからね。ただ此の場合、気落ちせずに、踏み止まれるのは、宗教的條養のある人に限ります。この意味からでも在留邦人に信仰を植付けることは、何よりの急務だと思ひます。」

と、まことに然うだと思つた。

なほ甚だ有難からぬことだが、邦人の中に妻を、或は人妻を酌婦に賣つて働かせてゐるゴロがある。偶々その女が子を生んだ場合、酌婦の稼ぎの邪魔になるので、これを小兒院に頼んで來るもののあるといふことだ。

ゴロつきの搾取制度と、私娼の奴隸制度の尻拭ひをさせられることは決して望ましいことではない。がしかし、罪のないコドモを思へば、そうした子供こそ、ここに收容しなければならぬものかも知れない。その子許りではない。その母親の心をも察したら、それらの児を一層不欄に思つていたはつてやらねばならないと思ふ。一人の母親が、主事へ送つてよこした手紙を左に掲げて見やう。

「前略」生かして戴くことが神様御旨ならば一日も早く子供を育てる母となりたうございます。いつでも子供に會ひたうございますが、又別れが辛うございますから、在院中は子に會はしていただく方がよいと思ひます。どうぞ、あの子供達に、母の踏んだ愚かな道を行かず、たゞ愛なる主の御手によりすがりつつ、神の正道に進み行く事が出来るやうにと朝な夕な祈りです。どうぞ今後とも子供達をよろしく願ひ申し上げます。主にある皆さまから送つて戴いた子供の寫真を毎夜抱いて寝ることのみが、せめての慰めとして暮して居ります。抱いては頼りずした夢など見ました時、夢なるが故に堪えられぬ程残念で、夢遊病者の様に消え行く愛の後を追ひ度くなります。

「中略」誰を怨むこともなく、凡ては犯せし罪のつぐなひでございます。さりながら、幾年も幾年も相別れて居て、若し神様の御恩恵により、母子共に暮す日が参りましても、その時は母子の情愛が薄らぎはしないかと、そのみ心配でなまりません。けれども、どれ程心を痛めても、自分の力でどうすることも出来ませんから、凡ては神に任せて今日一日々々を御旨に添ひ奉りて過し度いと望み希つて居ります。(後略)

文中に、子を思ふ母のこころと、薄幸な母親の断腸の思ひを読むことが出来やう。

なほ此の小兒院の経営には、收容児一人当り三十八弗を要するが、児供の親でも負担能力のある者からは保育料を徴収してゐる。しかし、三十三人の子の親の内、負担金を納めてゐるのは半数で、それも多くは一部分の負担であつて全額負担をしてゐる者は四人にしか過ぎない。で、院の経費約一萬六千五百弗の中、七千弗はコミュニティー・チェス口から、二千弗は有力な邦人から納める維持會費、二千弗は寄附金、五百弗は興行収益から、そして五千弗を保育料から、と予定してゐるが、なかなかその通りに行かないといふ。

羅府には百五十三の社会事業団体があって、内十九団体は児童保護団体としてその中の二団体が日本人の経営になってゐる。即ち当小児院と、そして奮教の童貞によって経営されるメリノール、小児園とだ。

合同募金は邦人から寄附する額よりも、邦人の団体が貰ふ方が遥かに多いといふ。かういふと、邦人は、この小児園に對し、半分ぐらゐしか力を添へてゐないことになるが、必ずしもそうでない。

面白い事は、この小児園のこどもたちの日々喰べる野菜類が、全部、邦人のお百姓さんたちの寄附になるといふことだ。それも先方から持って来て寄附してくれるのでなく、小児園の人が、空のトラックをもって毎早朝、第七街及び第九街の野菜のマーケットへ出かけて行くのだ。すると、そこで山のやうに野菜を積んで賣りに来てゐる邦人が、小児園の車を見ると、その野菜の幾つかを、その車の中に放り込んで呉れるのだ。

一々頼むのではない。また一々礼をいふ訳でもない。只、空車をひいて行くと、野菜が天から降って来て、帰って来ると、車の中は野菜で一杯になってゐるといふのだ。

マナが降つたのだ。これが、邦人のために邦人の降らせるマナであるだけに、余計うれしい気がするではないか。

野菜ばかりではない。着類や家具や古ミシンなどが邦人から寄附されて来るといふが、異邦においてであるだけに、うれしい限りだ。

最後に、小児園のニュースの中から、エピソードめいたものを摘記して、園の横顔を偲ぶよすがとしやう。

母は一昨年死に、病氣勝の父もつひに郡立病院に送られて、四人の子弟がR市から来た。第二世の保母は名の知れない奇蟲が彼等の頭髮に棲息して居ることを発見した。さあ大変、早速薬店に走ったか、効能書程はきかない。ボーイは坊主頭にして早速解決をつけたが、娘はさう簡単に片付かない。漸くのことで之ならばと、学校に行かせたが、二三日目に手紙を持って来た。可愛想にまともや数日學校を休まねばならない。母のない子は憐れだ。

これも、四人の姉妹のママは去年死んで、パパのKさんも肺を病んで友人の好意で今はクリーニング屋の裏で独り寝て居る。明日は郡立病院に行く。多分之が最後であらうと楠本のパパが子供等を連れて會ひに行かれた。

ハロー居るか？ 居るよ！ 暗い處から元気がない声がする。随分衰弱して居る。クックする人もない。自分は無論出来ない。

隣の店でキャンデーをウンと買ふて、四人の子供に与へ幾度も幾度もグッドバイをした。三歳のちよ子にキャンデーに気を取られて、パパの最後のグッドバイも聞えぬらしい。一入あわれを催した。

果してKさんは郡立病院で死んだ。禅宗寺で葬式が営まれた。若い保母の心尽くしで四人の子供等はパパの葬式に相応しい身仕度をして貰って楠本のパパと行った。帰って姉のT子が「私のパパは死んだ。今日からミスタ楠本が私のパパよ……」われ等に真心から彼女等のために祈らねばならない。

院内の参観を終わって帰らうとしてみると、楠本主事が帰って来た。事務所でいろいろと経営難を聞かされる。

テーブルの上に、貯金箱がある。プレゼントがあった時など、これに入れさせるのだといふ。参観者名簿に署名をせよといはれる。武藤千世子夫人の次に悪筆をふるふ。

帰途、學校から戻って来る院のこどもに出會った。みんな朗らかだ。「グッドバイ」といふと、ニコニコし乍ら「グッドバイ」をかへした。

自動車に乗ってからも、その児供たちの笑顔がフロントのガラスに映ってゐて消えない。

(この号はこれで終わる)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(149) — 村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和8年3月号(第12巻第3号)への掲載分です。

アメリカ巡礼(1)

ヴェニス of 盛り場

村島帰之

二十五年病臥の奥住夫人

南加小児院に程近い小丘の上に、奥住夫人を訪ふ。夫人は今から二十五年前、電車で轢かれ両足を失ひ、爾来、今日まで四半世紀の久しきに亘って病臥の儘である。しかし肉体は損はれても、夫人の魂は、この大きな不幸のために、却って光を添へ、訪れて来る在留邦人に對し病床から福音を述べ傳へてゐる。これがためミセス・リーチは女史の一家の家計をヘルプして夫人をして安んじて病臥伝道に精進させてゐるといふ。

二十五年の病臥！ わたしたちは、わづか一週間の病臥でさえ退屈と焦燥とを感ずるのに、ましてや、二十五年の久しきに亘って、ただ仰向けになって臥てゐるといふのは、何といふ辛気くさいことだらうと思ふ。しかも、夫人はその状態を、何の不平もなく受取って、却って、訪れて来る壮健な人々に慰めの言葉を与へてゐるのだ。

夫人の枕頭には聖書があった。それから、手細工ものの材料と。

「いいえ、少しも苦しいなんて思ひませぬ。かうにて静かに聖書を読ませて頂けることを神様に感謝してゐる許りです。」

さういふ夫人の顔は、健康そのもののやうに血色の善さと、幸福そのもののやうな笑顔のよさとを見せゐた。

ハリウッド郊外

奥住さんの家を出て、ついでにハリウッド見物と洒落る。高橋さんのドライブで、釜安さんが同道だ。

ブルーバートの大通りに出ると、音に聞こえたグローマーの映画館の支那建築が、スマートな洋館の中に異彩を放つてゐるのが目に這入る。「工費百萬弗を要したんですからね」と高橋さんが、自分のもののやうに話される。

ハリウッド・ホテルといふのがある。何でもカウボーイをやつてゐた男がこれを経営してゐたとかで、その男がハリウッドの草分けだといふ。そして、今ではハリウッドの大地主となつてゐるといふ。

道傍に消防の火見櫓のやうなものが見える。それが油井戸だ。世界の虚栄の市ハリウッドの真ん中に、油が湧くなんて、むしろナンセンスである。

やがて、自動車は美しいブルーバードの大通りを外れて、羅府の街を一瞬の裡に瞰下す丘の上に出た。アメリカにおける金持の別荘と世界に聞えた映画人の立ち並ぶビパリーヒルである。丘の上

には白や茶色の壁の美しい邸宅が、ポツンポツンと並んでゐる。それらがみな世に聞えた何某・何嬢の邸宅なのだ。

自動車はその邸宅を抱いた丘の裾をめぐる広いドライブ・ウエーをまっしぐらに走る。

少し行くと、道の中央に馬場が作られてあった。タグラス、フェヤーバンクスなどが、朝々、ここで乗馬の練習をやるのだといふ。

□リウツドを離れて州立カリフォルニア大學を見に行く。広い広い野原の中に、赤味かゝった建物が夢のやうに建ち並んでゐる。前面には数百台の自動車が待ってゐる。學生たちの乗りすてたミシンなのだ。ここは、パークレーの加州大學の分校なのだが、今では本校をも凌駕しさうになってゐるので、いずれは独立することになるだらうといふ。

古谷兄とチキン

十日

正午からエルモンテの古谷福松氏のところへ御馳走になりに行く。同行者は徳牧師夫妻と高橋さん。

古谷さんの事は前にも書いた。氏は郷里紀州南部の傳道を賀川先生に依頼し、その費用を負担してゐる人、見るからにガッシリとした、映画のカウボーイを思はせるやうな偉丈夫だ。夫人もたつつけ袴のやうなものをはいて、野良仕事にいそしんでゐる。

けふは私たちのため、沢山のチキンをほふつての大饗宴だ。

「賀川さんがアメリカへ来るといふことが判ってから御馳走用にチキンを飼って置いたんや。そのつもり十分、餌もやって置いたから、よ〜太つとるぜ。」

飾りつけ一つない言葉に、真情がにじみ出る。

食事のあとで、私が話をする事になって、ハイスクールへ行ってゐる令嬢たづ子さんをも向ひに行く。私は賀川夫人の話をした。

しかし、考へて見ると、古谷夫人もまた一人の「賀川夫人」だと思ふ。なぜなら、夫君が賀川先生に私淑してその郷里の伝道を託し、その費用を負担すると申し出た後は、夫人もまた夫君の片棒を荷負はねばならぬからである。

アメリカの百姓

アメリカの百姓はもちろん、日本の百姓の如く小規模ではないにしても、換言すれば、鋤鋤で一土づつを耕すのではなく、トラクターを使って一ツツに何エーカーかを耕して行くのだとしても、所詮は同じ労力一つで稼ぐのだ。

地主の如くノホホンで、小作米の這入って来るのを待つのは訳が違ふ。古谷氏の耕地は日本なら何町歩に当るか、兎に角廣いものだが、氏夫妻と、郷里から来てゐる親娘の四人を中心にして、この耕地全部の耕作が営まれるのだ。

生産の規模が大きいだけに思惑が外れた場合、例へば去年トメトが高かったのでトメ口を主として作ったら、今年は反対に安かったといふやうな場合、結局骨折損となって借金を背負ふことが少なくないのだ。

賀川先生はこの投機的農業経営の危険を説いて、立体的農業経営を提唱されたのはこのためだ。尤も人間誰しも一攫千金の夢を見たがるもの、ましてや内地から遥かにアメリカ三界まで出稼ぎに来てゐる人々が、果して先生の説を遵守するかどうかは甚だ疑問ではあるが、それだけに先生のこの忠言は邦人の耳に痛かったことと思ふ。

古谷氏だって、ありあまる金がある訳ではなく、収益の中から割いて、母國へ送金しやうといふのだから、少しでも収益を多くしやうとして、何かボロい儲けはないか——と思索した末が、思惑の耕作をやるに何の不思議もない。

「賀川さんへの送金も、此の頃は思惑が外れどうしなので、切れてばかりゐて済まんと思ふとるのでな。」と古谷氏は述懐した。

あわや自動車衝突！

夕方近くなって、帰途につく。坦々たる口イウェーを私たちは二台の自動車に分乗して、まっしぐらに走ってゐた。自動車の外に殆んど人一人、犬一匹、通らない道だ。もちろん、自転車などの一台も見つからない郊外の大道だ。私たちは五十哩ぐらひのスピードを出してゐたらう。私は高橋さんの運転してくれられる自動車のフロントに高橋さんと並んで席を占めた。うしろのお客の席には斉藤夫人が乗ってゐた。徳牧師夫妻はあとの車だった。私の前には、どこかの車が、これも素晴らしい速力を出してゐる。

と、前の車が何の信号も前触れもなく、突然、真に突然、急カーブをとらうとして停車した。無信号だから、当然、直進して行くものと信じて、スピードを出してゐた私たちの車は、速力かゆる

める暇もなく前車に追突！

と、うしろで斉藤夫人がキャツと悲鳴をあげた。が、当然衝突すべきだったわたしたちの車は、熟練せる高橋さんが、とっさに急回転の処置に出てくれたため、車体は道のない田圃に突入して行ったけれど転覆もせず、むろん衝突もしなかった。斉藤夫人が悲鳴をあげたのは、アワヤと肝を潰したのである。

私は不思議にも、平然としてみた。肝っ玉が坐ってみたのではない。高橋さんか信じ切ってみたからである。高橋さんも「本当に、命を縮めました」といって居られたが、私は口では「全く！」と相槌を打ちはしたものの、実際はさうではなかった。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(150)－村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和8年3月号(第12巻第3号)への掲載分です。

アメリカ巡礼(2)

ヴェニス of 盛り場

村島帰之

(前承)

十一日

日曜、ハリウッドの日本人独立教会へ説教を頼まれて行く。今は無牧で、東條さんたちが世話をして居られる教會だ。一時間ほど話をして、それから一緒に食事を頂く。

教会を出て、高橋さんの車にのせて頂いて、けふもまた近郊見物だ。高橋さんは私のため本務を放擲してゐて下さるのだ。勿体なく思ふ。釜安さんが同行する。釜安さんは洋服屋さんで、私のレデーメイドの洋服の長い裾を切ってくれたんだ。

ハリウッドを外れて、海岸近くへ出るとナショナル・ソルジャーズ・ホームが、美しい木立に包まれて建ってゐる。歐洲戦争の犠牲者が、損れた肉体を此處で養つてゐるのだ。やがてベニスに着。

ベニスの盛り場へ

ベニスに於ける浅草だ。ニューヨークのコネーアイランドに比すべきところだ。しかも、コーネーアイランドも、ベニスも、共に海に面して存在してゐる点は相均しい。乾燥した大陸の、そのまたドライな大都市に住む人が、肺臓一杯に新鮮な空気を吸ふて、そして一日の清遊を恣にしようとするれば、どうしても海へ出たいといふ気持になるのだらう。そして、この海辺に、自然に盛り場が出来上つたのかも知れない。

ベニス――本場のベニスの水はきたないと聞かすが、加州のベニスは太平洋の水だから綺麗だ。屈曲の小さい海岸線が、思ひ切り永く延てゐて、オシン・パークに続いてゐる。そして、ベニスとオシン・パークの間は、トラムが通つてゐる。トラムは無軌道、無架空線の電車で無蓋若しくは一寸した天幕しかなく、客は背中合せに腰かけ、側面に足を投げ出した儘、機械力で運ばれて行くのだ。海岸は、もう半月も前なら一杯の人だらうが、十月の声を聞いては、泳いでゐる人もない。

ベニスは娯楽場のオムパレードである。ダンスパビリオンがある。夏場だけのダンスホールだから、パビリオンの名があるのだらうが、それでも、日本のダンスホールよりも、よっぽど立派だ。アメリカの国旗で、美しい装飾のされた勸工場のやうな建物の中でジャズが鳴つてゐる。矢張り日本同様、テケツ制度で、六枚二十五仙、十五枚五中仙、四十枚一弗と記されてゐる。

ブランヂー――もちろん、飛込台もあるが、浴場は温水プールだから、外では秋凍を覚えても平気で泳いでゐるのが外からも見える。五六百の人なら楽に泳げやうといふ廣さだ。

見世物いろいろ

ショッコ―いろいろの射的。ピッグ・スライド―豚のおモチヤの迂り落し。

グラント・ダービー―おモチヤの豚の競馬。早く決勝点へ自分の豚を入れさせたものが勝になるゲーム。

ワルツェン・ランド―日本にあるのと同じメリーゴーランドの式の二人一組の回轉馬。二つの馬が旋回してワルツを踊るやうなので此の名があるのだらう。一回の乗り賃拾銭。

リンディー・ループ―横振りに動く大きな樽のやうなものの中で、急傾斜をして、その不気味な曲振りを楽しむもの、拾銭。

ドラゴン・バンブー・スライド―およそ二十間もあらうといふ龍の形をした竹筒の上からラセ

ン形になった軌道を、一気にまっしぐらにかけ降りて来るスリルを楽しむ遊びの一つ、拾五銭。

十哩旅行―スピードとスリルを狙ったもの。前記のスライドと異なるところは、前者が立体的に出来てゐて急転直下によるスリルを喜ぶのと反対に、後者は平面的に延びてゐて、それが胎内めぐりのやうに幾うねりうねるので、延長は十哩にも達しやうといふ長尺もの。その永い道中を或は平面を走って安心してゐると、急に瀧のやうに落されてキャットといつてゐる間に、またイヤといふほど高い處へはね上げられるといふ式。

シャッティング・ガレリー―坑道めぐり。これもスリルを狙ったもので、暗闇を使ったところが味噌だ。

さらに面白いものは、**Dush me if you can** と記して、板の上に一人の男が立ってゐる。板の下は深いプールだ。正面には的があつて、一つ五仙でボールを借り、その的に向つて投げる。巧く的に這入ると、男の立ってゐる板がひっくり返つて、その男は水の中へまっさか様に落ちる仕掛になつてゐる。つまり、殊忍性とナンセンスを狙ったゲームで、厳格な紳士の作法や守ることを強制されてゐても、根が移民のアメリカ人だ。たまには、他人を水の中へ敲き込みたいショックにかられる。そこを狙つたこれも一種のスリル満足機関の一つだらう。

私はスリルも怖いし、水落しも可哀相だしとあつて、結局、フライイング・サーカスと名づけられた日本在り来りの飛行塔に乗つてベニスを高所から鳥瞰しただけだった。

海に面したところでは、客の目方をいひ当てるハカリ屋があつた。見料は貳拾五銭だが、若し測つて見でいひ当てが三ポンド以上違つてゐたら、大きな菓子か人形をくれるといふ事だ。私は、疲つぱちで恥しいので、それもやつて見ず。

オーション・パーク

そこで、トラムに乗つてオーション・パークへ出かける。ノロノロ行くので、いつでも飛び乗り、飛び降りが出来さうだ。そのスローモーションに身を委せて、海の景色を眺めつつ連れて行くのも一興だ。

オーション・パークには栈橋が海に突き出てゐて、そこには大きなシュート（船釣り）があり、その周囲では釣の設備も出来てゐる。沖には一隻の船が繫留してゐる。そこが釣場になつてゐて、通船も出てる。

栈橋の前面一帯にはここもまた多くの娯楽機関がつまつてゐる。

デス オン ザ ギロチン——看板を見ると **Sensational thrilling** と書かれてある。アメリカ人の好きなスリルの上に、さらにセンセーショナルと形容詞が附加されてあるのだから、物見高い白人が黒山のやうにたかっている。私もうしろから覗き込んだ。

有難いことには、アメリカの人間も、イタリー移民全盛時代と違って、今日では一般に丈が低くなってゐるので、五尺四寸近い私は、背丈の方では格別劣つてはゐらず、背延びさへすれば、前面の光景が覗かれるのだ。

見れば、そこには一人の女が倒れてゐる。そしてその傍らに二人の大男が、おそろしいギロチンを持って立っているのだ。傍らの書いたものを見ると、これからその女をギロチンにかけで首をきって見せるといふのだ。もちろんそれは鏡を応用するトリックに相違ない。女が倒れてゐるところは人気を呼ぶためらしい。

ブレック・エニー——前面に無数のガラスが置いてある。ボールを一個五銭で借りて、そのガラスに向つて投げるのだ。一撃によつてガラスが微塵とぐだけた刹那、日頃、婦人や上役から抑圧されて、うつつしてゐた気分が、一時に解消するといふ一種の解心剤？だ。或はカンシヤク玉解消剤といふか。

スパード・ウェー——こども専門の自動車一回拾銭。

この外、プレーボールだの、ホイップだの、スキル・ボールだの、ポニー・ライドだの、チョコナーピレだの、スキー・ボールだの、フーチヤングだのと、あらゆるゲームが並んでゐる。

中には、「大声でお前の運を試みよ」といひ乍ら大小のおモチヤや菓子や籤引を賣つてゐるものもある。

大仕掛のゲームでは、1200ポイント・ゲームといつて、数を合せるものもある。

かうして、加州の男女は、ふところにありつた金のなくなるまで、愉羸を争つたり、スリルを味つたりして半日を暮すのだ、

週休制度の発達が、そして、自動車の普及がかうした遠方から多くの客をこの盛り場へ送つて来るのだ。

私にとつても、最も打ち寛いだ興味の深い半日だった。ゆつくりとゲームでも味いたかつたのだが、晩に説教を引受けてゐるので、せき立てられるやうにして羅府をさして急いで戻つた。

晩はパサデナ市の田島牧師の教會で話した後、十一時頃まで同牧師邸で話込む。

(この号はここまでで終わり)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(151) — 村島「なつかし・羅府の日本街」



「雲の柱」昭和8年4月号(第12巻第4号)への寄稿分です。

なつかし・羅府の日本街

羅府地震の報を聞いて、なつかしき同胞の身を
案じ乍ら、思ひ出を歌ふ

村島帰之

アメリカ式の長い上衣に
膝の膨れたズボンをはいて
短い足を内股に
うつむいて歩くのは誰だ？

「ユウ行くか」
「ミーも行かう」
「サムタイム行ったが」
「エニハウ行くよ」
日本語でもない
英語でもない
言葉を話すのは誰だ？

電飾した十字架の立つ
日本人教会の隣りに
賭博場「東京倶楽部」と同居した
本願寺の出張所が並び
ダロサリーの二階に
天理教の布教所が問借し
ドラッグストアの路次には

正一位稻荷の
赤幟が翻る。
ここは一体どこだ？

ガラスのドアを
押して這入る「御料理」屋
バー式の高い回転椅子で
喰べる蕎麦屋、壽司屋。
鰻丼を注文すると
缶詰の「柳川」を
出すうなぎ屋。
洋装の女が
「お待遠さま」と
持って来る「なべ焼屋」

ここは一体どこだ？
ショーウィンドーのガラスに
「日本風呂」と記した理髪店
奥への仕切にドアがなくて
「ふろ」と記した暖簾がゆれる。
「とろろ用山芋あり」
と記したグロサリー。
「十月号キング到着」
と大書した本屋。
角隠しの花嫁がゐる
と思ったら
婚礼用品屋の店飾り
三賓にのった
翁と媼も見える
ここは一体どこなのだ？

店の間には
兩陛下の御真影と
富士山の絵と
安物の浮世絵。
そして蓄音機が

「昔恋しい銀座の……」と
高らかに歌ふ。
夜ふけには
酌婦の往むアパートに
三味線の音じめも聞ける
ここは一体どこなのだ？

市廳の十階の白亜が
不思議相に
その街を瞰下してゐる
白人の運転する
赤い電車が
横目で見通る。
ここは一体、全体、どこなんだ？

日本か？
いや
アメリカか？
いや
では？
日光の明るく美しい
ロサンゼルス
ダウン・タウンの一角
聳立つ摩天楼はないが
ここぞ
なつかしい
同胞の住む街！

ロサンゼルスの日本街！

(この号はこれで終わります)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(152) — 村島「アメリカ巡礼」(1)

「雲の柱」昭和8年5月号(第12巻第5号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼（1）

羅府からサンタマリアまで

村島帰之

羅府少年審判所

十月十三日

午後から教会聯盟社會部の斉藤さんの案内で、高橋さんや久保田さんや徳武義さんと共に、羅府の郊外にある少年裁判所及びデテンション（監護）ホームを見學に行く。

威めしい嫌がある詳でもなく、清楚なオフィスである。少年裁判の本家本元のやうにいはれてゐるアメリカのそのまた十大少年裁判所とかの一つといはれるだけに、設備の整頓は驚くばかりだ。

ここで取扱はれるものは犯罪少年のみではなく、遺棄状態にある少年や不品行な少年も含まれてゐて、こゝで審問した後、これを少年審判所法によって處分すべきものか、どうかを決定するのだ。

審判室は極めてこぢんまりとしてゐて、周囲の壁にも寫真などが張ってあって、少年少女をして少しも怖れを抱かしめないやうにしてあることは、バンクーバーで見たのと同一型だ。

私たちは、少女や年弱の少年を審理する婦人の審理官の二人に会って、此処へ送られて来る少年少女の話を訊いた。その中で最も驚かされたことは、年少にして既に花柳病にかかつてゐるこどもの多いことである。

ここへ来る少年少女の半数はそれだといふ。アメリカの青少年の風紀の頹廢の様は窺はれた。「日本の二世にもそんなのがありますか」と訊くと、ぼちぼちあるといふ返事だ。その一例として、某といふ十五歳とかになる日本人の娘さんが、風俗上いかがわしい所があつて此処へ送られて来たが、既に貞操を失ひ、剩へ性病に感染してゐたといふ話。

「日本の第一世は犯罪率が低いが、第二世はぼちぼちあるやうです。女の子は今話されたやうな風俗上の点でありますし、男子のは、小切手詐欺で……」

と同行の斉藤さんが、そつと話してくれた。

かねがね、日本の二世には不良児が多いといふことを聞かされてゐたが、不幸にして少年裁判

所で裏書きされて了った。親の大一世に教養がなく、なまじにアメリカの教育を受けた二世は親を尊敬する気にならないのだ。そしてその結果が、放縦に流れて、男女ともに不良になって了ふのである。さらばえし第一世たちの心の中を思ふと、感慨なきを得ない。

なほ審理の進行中、逃亡の恐れのある者や家のない者、たとへあっても家庭の善くない者などは、一時此處に監護されることになってゐるが、そのわづかの間でも教護をゆるがせにせぬやうにと、いろいろと勉強の設備もしてあるし、その期間を利用して性病を治療する設備も出来てゐるのはさすがだ。

デテンションホーム

去って別棟になってゐるデテンションホームに行く。これは日本における少年保護所に相当するものである。審判の結果一定期間監察の下に置く必要ありと認められた者が収容されるところだ。

少年の部屋部屋は一つも飾りらしいものはないが、いづれもサッパリとしてゐて、椅心地がよさうだ。医療設備も図書室も立派だし、炊事場は立派なもので監置されてゐる。

炊事婦は、アイスボックスの中まであけて見せてくれた。

教室を見るといづれも女の先生が個人教授式に教へてゐたが、参考書の棚を見ると、日本に関するものも二三見えた。

すると、一人の女教師は、一つのパンフレットを私に示した。それは、ここの印刷工場で刷ったものらしく、表紙には鳥居の画を描いた上に **Konnichiwa** と記されてあるではないか。

「これはどういふ意味か」

と私に訊くので、私は **How do you do** といふ意味だと答へた。

日本に對して関心を持ってゐることはうれしかったが、それが普通の學校などでではないだけに、余計に面白い気がした。

作業場はいづれも小さな町工場位にあらう。印刷工場では雑誌や単行本を刷つてゐた。機械工場では飛行機や自動車をさへ作つてゐた。

プールには美しい水が満々とたたへてあつた。離れのやうな一室では、ブラスバンドが、一人の教師によって練習中であつた。

すべてが、小学校――それも最も整頓した――のやうである。

逃亡少年の留置室

庭は何十エーカーといふ広さである。樹木も茂ってゐるし、青々とローンも生えてゐる。言つて見れば、マア、大富豪の庭園のやうだ。刑務所といったやうな感じは微塵もない。逃げやうと思へばいくらでも逃げ出せやう。現に逃亡する少年も相当ある様子だが、ラヂオが発達してゐて、逃亡少年があると、直ぐその人相などを放送して警官に知らせるから、大概は直ぐ捕つて了ふといふ。

「あれを御覧なさい。あそこで黄色い着物を着て土木工事をしてゐる少年の群れを。あれはその逃亡して捕つて来た少年たちですよ。逃亡の懲罰として労働を強制されてゐるのです。外のこどもはラヂオを聞いたり、その他娯楽を取ることが出来ますが、あの児たちだけは一定期間、独房に監置されて、自由と娯楽から隔離されてゐるのです。」

と、教誨史が説明してくれる。

見れば多くの年長児に交つて十歳位の少年が、モッコのやうなものを荷負ふて土運びをしてゐる。私はいじらしい気がせずには居られなかつた。家が恋しくなつて逃亡したのだらうと想像したからだ。

ホームと別棟になつて、その逃亡少年を入れる監置場がある。窓が小さくて、内部も暗い。覗いて見ると簡単な寝所があるだけだ。なるほど、ここだけは、どうやら刑務所のやうな感じがする。私ちちは、なるべくそのこどもたちの方を見ないやうにして通り過ぎた。

徳武義氏は元少年審判所教官だっただけに、綿密に視察せられるので、遅れ勝であつた。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(153) — 村島「アメリカ巡礼」(2)

「雲の柱」昭和8年5月号(第12巻第5号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(2)

羅府からサンタマリアまで

村島帰之

(前承)

モンテペロー

夕方から約束によりモンテベローの植松三代作氏邸へ出かける。例により、高橋常次郎氏のドライブである。

植松さんは沼津の人。南加における邦人植木栽培業者中での成功者だ。モンテベローの邸内に堂々たる温室を持ってゐる外、シラバデラの丘陵地にも素晴らしい栽培地を所有してゐる。

私たちはまづ暮れない内といふので、シラバデラの畑の方へ行って見る。羅府から自動車で行くか二三分の行程であるのに、気温が大分違ってゐる。ここでは椿を二十萬本あまり栽培してゐるとかで、苗木の上に樋のやうな鉛管を這はせて霧のやうな水を撒く装置がしてある。すべてが大仕掛けだ。椿の外に柳も七エーカー余り栽培してゐたことがあるといふ。

植松さんはいふ。「植木屋は自然をあいてにしてゐる商売です。いはば神さまの直轄事業ですからね」と。

再びモンテベローの植松邸に帰って、奥さんや子たちと一緒に食事を頂き、なほ植松氏撮影の映画を見せて貰ふ。パサデナの花祭の映画は殊に美しく出来てゐた。

夜晩くなってから高橋さんと一緒に帰る。途中、ゴトゥキンといふ富豪の家の前を通る。大きな家だ。庭の中に鉄道が引き入れてあって、主人が旅に出る時には、わざわざ停車場へ出かける面倒がなく、庭先から直ぐ汽車に乗れるといふ豪勢さだ。

しかし、それは善いとして、金を盗まれはしないかといふ懸念から、周囲の塀には高圧の電流を通した電線が張り巡らされてあつた。何のことはない。富豪は、自分で作った牢獄の中に自ら入つてゐるやうなものだ。富豪は「自由」と「金」とを交換してゐるのだ。それが果たして幸福といふものだろうか。

十三日

いよいよロサンゼルスに別れを告げる日が近づいた。

一ヶ月近く住み慣れた地を離れるといふことは何としても佗しい。明から用もないのに、日本人街をあちらこちらと歩き廻って見る。

常夏の國でも、さすがに十月の中旬だ。朝夕は少しく涼味を感じる。それに、これから北部へ旅をするのであって見れば、オーバーの必要があるが、自分は携帯してゐない。そこで、各教会や婦人会などから頂いた講演の謝礼で、記念のためにオーバーを買ふ事とし、静岡牧師に案内して貰つて服屋に行く。サイズ別に沢山のレデーメードが並んでゐるので、自分の好みに合ったオーバーを

見出すのに十分とはかからなかった。ついでに今日もまた古本屋を漁る。

西田惣五郎氏から、沢山の蓄音機のレコードを頂く。令嬢幸子さんが、一々分類してくれられた。

さよなら羅府

十四日

ニューヨークで集めたものは、ニューヨークからトランクに詰めこんで、その儘サンフランシスコに送っておいたが、ロサンゼルスへ来てから買った数十冊の書籍が、またも荷厄介となった。

そこで、これは、いずれ故国に向かってアメリカを去る時、高橋さんたちが見送りのため桑港まで自動車で出かけて来て下さるといふので、その時持って来て頂く事にして、自分は手廻り品を詰めたスーツケース一つを持って出発することにする。

ロサンゼルスにおける最後の食事を高橋さんの部屋で頂く。思へば随分永くこの部屋のお客になったものだ。町子夫人や二世ベレーさんとも泌々話す。ベレーさんは切手の蒐集をして居られるので、ハワイと日本の切手をお送りする約束をする。

高橋夫人は、ホットケーキが私の太好物であることを知られて、ホットケーキを焼く道具を贈られる。高橋一家から受けた好意は生涯忘れることが出来ない。

みなさんに送られて一箇月お世話になった合同教會の門を出る。けふもまた高橋さんが自動車を送って下さるのだ。

羅府の街よ、人よ、さよなら。

自動車は羅府の街を離れて、やがて山路にかかる。そして約百マイルの道を三時間足らずでサンタ・バーバラ着。

サンタバーバラ

サンタバーバラは、すでに一度賀川先生と一緒に来たところだ。前回先生に白人のための講演に多くの時間を割かれたため、邦人に対する分はわづか二十分足らずに短縮されるに至ったので、実はその補足の意味で自分が再度此処を訪れることになったのだった。

サンタバーバラは名にし負ふ山容水態共に美しき別荘地だ。アメリカの大金持ちがここに別荘を営んで、夏季はニューヨーク、シカゴの本邸から此処に暑さを避けるところだ。北は一帶の丘陵で、

鬱蒼とした樹木が茂り、南は美しきビーチを隔てて、水清き太平洋が展けてゐる。

或は広々としたビーチに、或は起伏する丘に白く縫糸のやうに引かれた自動車道路の美しさ――
私たちはエデンの園に行く心地で、ビーチから山手へ自動車を走らせた。

電 車 の 失 業

サンタバーバラは富豪の別荘地だけあって、自動車を持合せない家としては殆どなく、従って電車に乗る者などは至極稀なので電車会社が立ち行かない。のみならず、自動車を走らせるのには電車の存在が邪魔になる。そこで、サンタバーバラでは市内の電車を廃止することとなり、私たちが市中を走っていると、今しも、軌道を撤去中のところを見かけた。

電車が失業してういるのだ。自動車の洪水なのだ。アメリカの機械文明といふものを泌々思はされる。私たちの自動車の止まったところは、シカゴの銀行家夫人の別荘であった。といって、銀行家の夫人に招かれた訳でなく、そこにガーデナー（造園客）として雇はれ住んでゐる西田さんの家に客となったのだ。

西田さんの住ひは何エーカーといふ広い庭の片隅に建てられた家であるが、その銀行家の夫人といふのが年に一二度来るだけだから、何のことはないこの公園のやうな庭と家が西田さんの庭であり家でありするやうなものである。けふも勿論、その夫人は来てゐない。私たちはのびのびとした気持ちで庭園内を散歩することが出来た。

ああ河田牧師

夕方から日本人教会へ講演のために出掛ける。聞けばこの教会の入り口で一人の牧師が鮮血にぬられて倒れたのだといふ。

これについて西田夫人が涙ぐみ乍ら話すところによると、河田牧師――この教会の若き牧師――は一人の暴漢からあらぬ怨みを買ってゐた。それは熊本生まれの堀田といふ酒飲みと、神奈川県出身の荒島浅蔵（四十七）といふ船乗りの喧嘩を仲裁し、その時、荒島のため歯を折られて入院した堀田を、同牧師が匿ってゐるものと誤解し、牢獄を出たばかりの荒島が酒に勢いをかりて教会に強談にやって来た。そして型通り牧師を脅迫した末、同氏がこれを拒むや、携えて来たピストルを以て射殺したのである。牧師は歳わづか三十六歳であった。

酒と賭博と女のトリオの植民地に、正しき道を説くことの如何に至難であることか。河田牧師は植民地伝道の尊き犠牲者であったのだ。

河田牧師の遭難の話しを聞いた後、その尊い血潮にぬれたことのある石段を踏んで教会堂に入っていく時、私は身のひきしまるやうな思ひがした。

教壇——そこにも河田牧師の足跡があらう——に立った私は、まづ河田牧師の犠牲を冒頭語にして、賀川氏夫妻の犠牲的生活について約一時間に亘って講演した。第二世たちも聞いてみたが判ったかどうか疑問だ。この教会の第二世たちは非常に善良で、表彰されたこともあるといふことだ。

晩くまで西田さんの客間で話した後、私は離れの部屋で寝る。芳子さんは私をもてなすために自分の部屋をあけてくれたのだ。芳子さんはおとなしいお嬢さんで、小学校を卒へたら看護婦学校へ這入って、病人のために生涯を捧げるのだといって居られる。尊い志しだと思ふ。

(つづく)

賀川豊彦の畏友・村島帰之(154) —村島「アメリカ巡礼」(3)

「雲の柱」昭和8年5月号(第12巻第5号)への寄稿分です。

アメリカ巡礼(3)

羅府からサンタマリアまで

村島帰之

(前承)

高橋さんとの別れ

十五日

空気のおくまで澄んだ海辺の丘上の一夜は、迎も寝心地の善いものであった。それで八時過まで寝込んで了った。

目をさますと、頭上の網戸から朝の爽々しい大気が流れ込んでゐる。おもやの方では、私に遠慮して小声で話をしてゐるみんなの音が聞える。もう朝飯はすんだらしい。

朝飯後、みんなで邸内を散歩する。ドラゴン・フラワーとか、極楽草とか、珍しい花が至るとこ

ろに咲いてゐる。

「何しろ、主人が見える時に、一時に花を咲かす工夫をしなければならぬんだから骨ですよ」と西田さんが話す。

前回のサンタバーバラ訪問の際、演説会場前で卒倒してその儘逝去された方の未亡人が、その時、お世話になったお礼だといって沢山のチキンを持って来て下さる。その贈物のチキンやら何やら彼やらの珍味佳肴で盛大なる午餐会を開く。席上、柄にもなく揮毫などをする。

ここでいよいよ、高橋さんとお別れだ。

ロサンゼルスの約一ヶ月を、親身も及ばぬお世話下さって、なほここまで送り届けて下さったのだが、こゝから先に西川さんが送って下さる事になったので、いよいよ「さよなら」をいはねばならなくなった。本当に名残惜しい気がする。心からの感謝をこめて「サヨナラ」の握手を交す。

午後三時、高橋さんたちは羅府へ、そして私と西田さんの一家はサンタマリアへ。

サンタマリア

ロサンゼルスからサンタバーバラまでは高橋さんに、そして今はまたサンタバーバラからサンタマリアまで西田さんに自動車ですべて送って貰ふ。私は、何だか、とうまる籠で宿場から宿場へ送られて行く、往時の囚人のやうな気がする。

サンタマリアまで私を送って行くためには、西田さん一家は、どうしても一夜を自動車であかさ準備をしなければならない。なぜなら、西田さんの子たちは明日も学校があるので、どうしても、その晩の中に帰って来なければならないからだ。そこで、西田さん御夫婦は帰り道に子たちを車内で寝かす準備をして出発された。

美しい山峡の間を縫ふて、坦々たるハイウェイの上を私たちは運ばれて行く。二三十哩も来た頃には、陽が傾いて月が出た。人の子一人通らぬ山路の薄暗を衝いて、私たちの自動車は時速四五十哩も出したらう。

かくて私たちがサンタマリアの街に這入った時には既に灯が点つてゐた。

牧師大下康雄氏のお宅に落ちつく。小学一年に通學中の可愛いお嬢さんが、昔からの舊知のやうに歓迎してくれられる。お嬢さんの級友の白人のこども仲間が流行つてゐるのだらう、マニキュアの液を、私の爪に塗ってくれられる。

「そんなものをおぢさんの爪にお塗りしたら、おぢさんがお困りになるからおよし」
と母さんが仰有る。しかし、お嬢さんは面白がってせっせと私の不恰好な爪を粉飾してくれられる。私にお嬢さんのなすままにした。私の白い爪が、めのうのやうに次第に赤く光り出して来た。

やがて講演をする時間が来た。此處まで送って来て下さった西田さんは、月光のある間に帰らないと、山道のドライブが危険だといふので引き返される。リレーレースがまた一組すんだ訳だ。リレーのチャンピオンよ。運ばれるパトロンはよろこんでゐます。

日本人教会はバラツグ風ではあるが可成りに廣い。私は此處でも賀川先生の話をした。同胞はいづれも自動車でやって来てみたが、中には愛児を漕けて来て、講演の間、愛児を自動車内に寝かせて置いてゐるのもあった。

ガタラロップ

十六日

眼をさますと、ピンクのカーテン越しに、乾燥した太気が冷え冷えと頬をかすめてゐる。スパニッシュ風の建築の内部の壁に、青と白の単色で塗られて素朴そのものの如くだ。枕許の青い植木鉢を包んだ赤い紙が室内に妙に目立つ。

朝飯を頂いてから、大下牧師の自動車で、サンタマリアから数哩離れたガタラロップへ出かける。ここは邦人の群居するところで、殊に野菜の産地として有名だ。

此の地方一帯に住む邦人は三千人に達するだらう。ガタラロップだけでも千六百人はゐる。邦人の耕作反別は一萬エーカーの多きに達し、選挙権を持つ者も四五十人は居らうといふ。

気候に恵まれて、一年中、何かしら耕作の仕事があるのは、此處の住民の大なる福音だ。まづ夏のレタースが最も金上りが多く、八、九月から翌春へかけては大蓼、スノーボール。十一月以降はカリフラワー。十、十一月はトマトといふ塩梅。特にカリフラワーの栽培は八割まで邦人の手になるといふことだ。

しかし、此の地方の野菜栽培は昔から行はれてみた訳ではない。八、九年前までは砂糖コーンの栽培地だったのが、相場の下落で、邦人が別に野菜を試作し出したところ、それが当たったといふのである。

それで今日では一人で何百エーカーといふ廣い面積に亘って耕作してゐる邦人もあって、下働き

にはヒリッピンやメキシカンを使用して大規模にやっけてゐる。

邦人経営のキャンプも四箇所あって、八萬弗以上の資本を固定してゐるといふ。邦人経営キャンプは南氏のものが最も大きく、荒谷氏及びユニオンがこれに次いでゐる。南氏は三十年以前から此の地にあつて、現在では二人のアメリカ生れの子供の名義で土地も買ってゐるし、借地料として支拂ふ金額も年三萬五千弗に上つて、年収は五十萬弗に達するといふ盛大さだ。

私たちはこれ等の成功者の家を訪問して見たが、不在のため會ふことが出来ず、わづかにその荷造場だけを見る事が出来た。

野菜の荷造り

ユニオン・キャンプでは荷造り場に貨車が引込まれて、邦人の男女の手で括られた人蓼や包まれたトマトがどしどしと貨車に積入れて行くのを見た。

人蓼括りといつても、括り合せる人蓼のサイズが同一であることを必要とするので可成り六ヶしらしいが、熟練した男女は器用にそれを揃へて、電光石火の如くそろへて行く。

トマトの如き、私が時計で計つて見ると、一分間に約六十五個の包みを拵へてゐた。これ等の荷造による収入は三年以前の好況時代には、一日に十弗以上にもなつて、これがため邦人の子女は、SSも休んで働いたものだといふが、今日ではすつと下つて、一日二弗位にしかならないといふことだ。

それでも、アイスボックス附の野菜貨車は日々十八九輛も東部に動いて行くといふから素敵だ。

カリフォルニアの禿土を緑化したものは邦人であり、東部の白人にビタミンを供給するものもまた邦人だ。排日なんて、以ての外である。

此處にも東京クラブ

荷造り場を一巡して、ガタラロップの街へ出かける。停車場付近には商家が立ち並んでゐるが、その大部分は邦人だ。その中に一軒、「東京倶楽部」と記されたのは、加州のどの日本町でも見るのと同じ家の構えで、説明するまでもなく、邦人の賭博場だ。野菜作りや野菜くくりで稼いだ金を、一挙にして失つてしまふ場所だ。

酒とバクチと女、この三つが、此の地方の邦人の生涯を暗くしつゝあるのだ。

「この辺の店で、秘密に酒を売つてゐないところは、マアないといつて善いでせう。そして歓迎

会とか送別会とかで、酒を出さぬ会合もまた絶無だといって過言ではないでせう。土瓶にだまされてコップを出すと、この国では売らぬ筈の酒であったといふ例は、此の辺ではザラに出くわすところ。仏教の坊さんは、善く悦んでこの涅槃湯を受け、また賭博場の寺銭の献金を甘受するので、此の地方に数年ゐると、シコタマ懐が肥えるのです」

と、大下牧師は悲憤の声をあげた。

「でも、同胞がみなその方へ誘はれるといふ訳では勿論ありません。善良な人々は毎年多額の送金を故郷へしてゐますし、六千弗もするトラックカーを月賦ではあるが買入れて、地道に働いてゐる人も少なくないです」

牧師の話しを聞きながら、私は故郷遠く離れて来て営々と働いてゐる同胞の上に幸多かれと祈らずには居られなかった。

小学校を見る

ガタラロップからサンタマリアに引き返して、付近のハンコックの養鶏場を見る。驚くなかれ、六万の鶏を飼つてゐる。そして可憐なこの鶏の外には七面鳥もゐた。クリスマスにはその大部分がほふられるのだらう。

付近にはまた、同じハンコック、ファウンデーション経営の航空学校があった。ハンコックはオイルの製造元だ。航空教育をすることは同時にオイルの販売拡張策でもあるわけである。

去つて、大下牧師のお嬢さんの通学して居られるグランマー、スクールを見学に行く。

スーパー、インテグレント（市視学）が、校内を案内してくれる。各学年の教室の外に、電気や木工や機械の教室もあり、またブラスバンドの教室のあるのには、貧乏日本からの参観者は唯ダアとなるばかりであった。

各学年の教室を覗いて見る。先生は悉く女教師で、日本からの参観者と聞くと「這入れ」といふ。生徒は日本のやうに行儀よくしてゐる者は稀で、頬杖をついてゐる者、後ろを向いてをゐる者、足を机の上に上げてゐる者など、など、千差万別である。さすが自由を愛するアメリカだ。教育まで自由なのかと驚く。

上級のクラスでは、三方にある黒板の前へ全級生徒といつても十人足らずだが一線を立たせて、先生のいふ英語を、スペイン語に翻訳して書かせてゐた。聞けば、外国語は欧州戦後、独逸語を小学校の課程から省いて、スペイン語と仏語とを課してゐるといふ。

校長さんに会って、日本人第二世の成績はどうかと聞くと、言下に「グード」といって推奨した。これはお世辞でないらしい。

大下牧師の話では、先般日本人の父兄が、教師を招待してスキヤキを御馳走しながら会談したが、非常に好結果を齎したといふ。スパニッシュ、スタイルの学校にも好感が持てたが、邦人に好意を持つ学校当事者には更に好意が持てた。

かくして、南加の最後の日が暮れた。大下一家と楽しい晚餐を頂いてから、街の或る邦人洋裁店の店の間で、二十人近くの邦人のために、日本の状況について講演した後、夜中の十二時近く、大下牧師に見送られて、人気のないガタロップのステーションからひとり、桑港の汽車に乗った。

寝室に這入って、所在なさに自分の手を見ると、大下牧師のお嬢さんが塗られたマニキュア液のために右手の爪だけが、処女のやうに紅色を呈してゐる。その滑らかなマニキュアされた爪を撫しつつ、私はいつか眠りに落ちて行った。

(この号はこれで終わり)